

# 明日に挑む

## 芽吹く福島の力

# 31

相馬市北部の山あいにある大坪地区。のどかな田園風景が広がる一角に、大野村農園代表・菊地将兵衛(三〇)の管理する養鶏小屋がある。

午前六時に決まって顔を出す。自由に駆け回る約三百二十羽のニワトリに餌や水を与える。飼育しているのは純国産鶏の卵肉兼用種「岡崎おうはん」だ。黒っぽい羽が目玉。もみ殻がぎっしりと敷き詰められた鶏舎内を自由に動き回る。せいか、筋肉が引き締まっ

ている。体調に変化はないか。こだわり抜いて育てている一羽一羽に緊張したまなざしを向けた。

# 明日に挑む

## 芽吹く福島の力

# 32

相馬市の大野村農園代表を務める菊地将兵衛(三〇)は東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から二カ月後に帰郷し、農業を始めた。当時の厳しい状況を忘れることができない。

市内の農地の約四割に上る約千二百畧が津波被害を受けた。原発事故の風評の影響もあり、離農する世帯が相次いだ。地域が暗く沈んでいた。就農したての若者に周囲は冷ややかな目を向ける。「専業農家だって、これから飯を食っていける

地区の祭りや集会などに積極的に足を運び、住民に酒をついで回った。朝から晩まで土をいじる姿が周りの目に留まるようになる。「俺の畑を使うか」。協力を申し出る人が徐々に増えていった。「先祖伝来の土地を荒らしたくない」との思いで、若い自分に託してく

# 明日に挑む

## 芽吹く福島の力

# 33

相馬土垂(どだれ)。二十年ほど前まで、相馬地方などで栽培されていたサトイモの在来種だ。味は大きく変わらないが形が細長い。相馬市の大野村農園代表を務める菊地将兵衛(三〇)は今年、消えかけていた伝統野菜の本格的な栽培に乗り出す。

一部の農家によって、昭和四十年から五十年代にかけて栽培されていたサトイモがあったと人づてに聞いた。復活させて、相馬の農業に新たなブランドを生み出したい。夢が広がった。

しかし、地元文献に記述があるだけで、写真もなかった。情報を求めて高齢の農家や県、市、種苗店、直売所などを訪ね歩いたが空振りの日々が続いた。

第2部 大地に生きる



# TPP発効に備え

「相馬土垂」を手にする菊地。今年から本格的な栽培に乗り出す

来年以降の出荷を目指して、伝統野菜の復活に懸ける菊地の情熱に触れた。農業に真剣に取り組んでいる若者の姿は自分の励みになる。珍しい形をしたどだれは間違いなく市場で注目を集めるだろう」と期待している。

第2部 大地に生きる



地元産の餌にこだわって純国産鶏「岡崎おうはん」を飼育している菊地

# 極上の卵を届ける

ため、煮込んだ魚のアラや水に溶いたヨーグルトを与える。暑い時期はトマトやスイカ、特製のニンニクエキスを混ぜ夏ばて防止に努めている。卵かけご飯にす

ると、豊かな風味が楽しめる。と評判だ。十個入り二パック七百円台と割高だが、わざわざ鶏舎まで買い求めに来る人もいる。

「人の健康に良いと思うことをニワトリにもして。旬の物を食べれば体が丈夫になる」と説明する。

相馬市石上地区の兼業農家に生まれた。地元の小学校を卒業し、仙台市の高校に進む。その後、全国各地の農家に住み込み農業を学んだ。東京都内で暮らしていたが古里に戻りたいと考えていた平成二十三年三月、東日本大震災が起きた。

(文中敬称略)

第2部 大地に生きる



研修生の吾妻に野菜の栽培方法を指導する菊地(右)

# 60人の後継者育成

「ロッコリー、キャベツ、白菜、ニンニク、トマトなどで約三十種類を季節に応じて生産している。農業を減らすの味がする」と好評だ。ブ

を指導している。これまで六十人ほどが「卒業」した。農業の経験がない関東地方の二十代男性がほとんどだ。

昨年九月から学んでいる吾妻聡(二七)はいわき市勿来町出身。会社勤めをしていたが、ストレスで体調を崩し昨年五月に退社した。土起こしや野菜の種まき、どれも初めての体験だった。将来は地元に戻って農業を始めたいと目標で、福島県産というだけで今は値段を下げないと売れない。それでも、安全・安心な野菜を作り続けられれば消費者の信頼を得ることができると考えている。

菊地が新たなブランド野菜作りにこだわるのは昨年秋、大筋でまとまった環太平洋連携協定(TPP)を意識しているためだ。発効すれば、関税の引き下げられた安い輸入農産物が市場に大量に出回ると予想する。「無農薬」「高品質」といったセールスポイントがなければ、国内産は太刀打ちできなくなるだろうと深刻に受け止めている。地元産の餌にこだわった鶏卵を生産する。有機栽培の農産物売り込む。相馬にしかない伝統野菜をアピールする。こうした取り組みを続け近い将来、待ち構えている荒波に対抗しようと策を練っている。

(文中敬称略)